

アジアの生活と文化

本研究プロジェクトは、アジアの諸相を知り、アジアへの関心を高めたいという動機から立ちあがった2001、2002年度のプロジェクトを受け継いだものである。アジア地域における固有の環境と生活、人と暮らし、それらを支える文化的な考え方などを明らかにし、多文化共生のあり方を探ることを研究目的としている。

プロジェクト全体としては、研究会を兼ねた講演会を開催した。また、2004年度には夏期休暇を利用して韓国ソウルおよびその近郊へメンバー全員での現地調査を実施した。2005年度の春期休暇には、2004年12月26日のスマトラ島沖地震の被災地の一つであるタイへの現地調査を、関谷雄一が実施した。

アジアの諸相を知り、アジアへの認識を深めることにより、アジア全体の現状がおのずからみえてくるものと考え、各研究分野から多くの講師の方をお招きして講演会を開催した。講演会には、プロジェクトメンバーに加えて総合文化研究所所長をはじめ学内の常勤・非常勤の教員の参加が得られた。講演で取り上げられた地域は、韓国、中国、インド、日本、タイ、インドネシアなど広範囲であり、講演内容も、宗教、政治、経済、社会、自然科学、文化と多岐にわたるものであった。これまでに開催した講演会の概要は、次の通りである。2004年度には、東京大学伊藤亜人氏による「アジアの宗教」（6月29日開催）、目白大学陳力衛氏による「明治初年の日本僧の北京見聞録」（7月22日）、本学非常勤講師三浦明子氏による「最近のインドの対外関係」（11月5日）、早稲田大学菊池靖氏による「文化的多様性と日本人社会行動様式」（11月19日）の講演会を開催した。翌2005年度には、千葉大学石戸光氏による「アジア太平洋地域の多様性—国際社会と市民社会の相互関係」（6月20日）、本学非常勤講師金智美氏による「韓国の仮面劇に見られる民俗文化」（7月8日）、東京大学山川隆氏による「東南アジアの農業とバイオテクノロジー」（11月4日）、本学非常勤講師茨木祐子氏による「白袴と緋袴」の講演会を開催した。講演を通して、アジアが地理的、社会的、文化的に多様であり、政治的、経済的にも格差が激しいことをあらためて認識した。アジアに関わる研究・教育を進めていくことは、アジアの中にある日本にとって、また、これまでアジアからの留学生を受け入れている本学にとって重要なことであると思われた。

これらの研究活動を踏まえて、プロジェクトメンバーは成果をまとめ、本年報に次の通り発表する。松本美鈴は、生活文化の根幹をなすものである年中行事を研究対象として、関東およびその周辺地域に居住する女子大学生の家庭における年中行事およびその食べ物

に関するアンケート調査を行い、現代の家庭における年中行事およびその行事食の現状を明らかにし、年中行事を支える要因を探り、現代の家庭における行事食の意義を考察した。鈴木すゝ江は、大自然の大らかさが備わり、毛筆と切り離せない和紙に対する日本人の強い愛着、この不思議について、文献資料と実物資料の双方から論じた。渡邊良智は、アジアと日本との政治的・経済的・文化的摩擦の一因である日本人のアジア・イメージの基層概念を明らかにするために、明治時代の新聞報道の分析を通して、日本のナショナリズム形成とアジア・イメージ成立との関連を探り、日本人のアジア・イメージの特徴について論じた。八耳俊文は、アジアと日本との関わりを考える一助として、東京帝国大学理学部を卒業後、上海自然科学研究所に赴任し、戦後もそのまま中国に残り、文化大革命の最中スパイ容疑で逮捕され、1970年に獄死した岡田家武を研究対象とし、文献資料および現地調査などをもとに、彼の研究活動・生涯を明らかにした。関谷雄一は、アジア2カ国（タイ・パキスタン）、アフリカ1国（ケニア）における地域社会組織（CBO）の活動と役割を紹介しながら、これら地域に共通して見られる特徴や社会開発における役割についての分析を行い、今後のCBOの活動を活発化して市民のエンパワーメントを強めるための課題を論じた。

（松本美鈴）

現代家庭における年中行事と食べ物

松本 美鈴 （家政学科助教授）

和紙を語る人々

鈴木すゝ江 （家政学科教授）

日本人のアジア・イメージに関する研究

渡邊 良智 （教養学科教授）

岡田家武の江戸化学史への関心

八耳 俊文 （教養学科教授）

地域社会組織（CBO）基盤の多様性と課題：アジア&アフリカの比較分析

関谷 雄一 （一般教育助教授）